【試合中の怪我・事故などの取り扱いについて】

（公財）全国高体連バドミントン専門部

●（公財）全国高体連バドミントン専門部及び（公財）日本バドミントン協会の主催する全ての第1種大会において、試合中に事故や怪我が発生した場合は、原則として次の手順で処置を行うものとします。なお、その他の処置の判断を必要とする場合は、（公財）日本バドミントン協会の競技規則・大会運営規程により、大会のレフェリーが判断（決定）する事になります。

【試合中の選手によるアクシデントの対処について】

試合前の練習中に発生 → レフェリーに棄権を申し出る

練習（公式・非公式を問わず）

試合開始（ラブ・オール・プレーのコール）後

ア ク シ デ ン ト 発 生（A～Cの判断は主審によるがAとBに併合性有り）
（インターバル中は除く）

A. やむを得ない事故発生（選手の不可抗力の部分）	B. 怪我発生	C. 足の痙攣発生
＊ラケットがぶつかり出血する ＊鼻血が出る ＊シャトルが目に当たる　など	＊足の捻挫 ＊パートナー同士の衝突 ＊アキレス腱切断　など	（現在日本バドミントン協会では怪我には該当しない見解である）

A又はB

【主審】
主審はすぐに試合を中断させ、すぐにレフェリーを呼ぶ。（当該プレヤー以外は勝手にコート内には入れない）
＊レフェリーはすぐに医師を呼び、出血があれば、まず止血する。

【主審】
主審は試合の中断時間を計り、審判用紙に記録する。
＊処置のための時間（試合続行可能な目安の時間）についてはレフェリーが判断（必要なら医師と相談して）して主審に言う。

【レフェリー】
レフェリーは必要と判断すれば、該当の監督を競技区域に呼び、監督と話し合う。

- 【主審】時間内に回復すれば、試合再開する
- 【主審】回復時間を過ぎた場合はレフェリーをすぐ呼ぶ。
  - 【主審】レフェリーの指示を仰ぐ。
    - 【レフェリー】レフェリーは主審に適切に指示する。処置回復時間の延長時間の設定や場合によっては選手（監督）への棄権勧告の助言を行う。
      - 【主審】主審はレフェリーの指示で「棄権」をコールする。

B又はA

【主審】
（出血がなければ）
主審はすぐに当該選手に、プレーの継続の意志を尋ねる。
＊レフェリーはすぐに医師を呼び、出血があれば、まず止血する。

- 選手から棄権の意思表示がある場合▲
  - 【主審】主審はすぐに「棄権」を宣告し試合を終了させる。
    - 【主審】主審は試合終了後、レフェリーに報告する。
- 選手から棄権の申し出がない（試合を続ける意志がある）
  ＊スプレー・バンドエイドは認め、テーピングは認めない。
  - 【主審】そのままプレーを続けさせる▲
  - 選手が起きあがれない。▲
    - 主審判断
      - 【主審】黄色（警告）→赤色（フォルト）のカードを使用していく。
      - 【主審】レフェリーを呼び、報告する。
        - 【レフェリー】レフェリーは必要なら該当の監督を競技区域に呼び、当該選手と話し合わせ棄権を促せる。
          - 棄権を選手が了解した場合
            - 【主審】主審はレフェリーの指示で「棄権」をコールする。
          - 棄権の助言を聞き入れない場合
            - 【レフェリー】当該選手が続ける場合でも、レフェリーが競技区域付近で試合を観察し、これ以上無理（選手生命に関わるなど）とレフェリーが判断したときは、「試合を途中で終了」させる。

C

【主審】
主審はすぐに当該選手に、プレーの継続を促す。
＊スプレー程度は認める。時間のかかるものは認めない。

- 選手はプレー続行の意志がある　▲
- 選手から棄権の意志表示がある場合▲

▲は同じ扱い

【注意事項】　＊レフェリーについては、ディピュティ・レフェリーが代わりを務めることができる。